

八銀杏

第48号
令和5(2023)年
2月14日
藤嶺学園藤沢
中学校・高等学校
新聞部
(高校)
中田大翔 村元颯泰
片桐伊織 三田航太郎
井上晴道 井上晃喜
櫻山翔太 荒嶋航成
高橋 新 水野 真
野田 諒 細貝 陽
田中湧大 植竹隼也
(中学校)
経澤悠希 稲生海風
川村一惺 池田晃太郎
高橋航之介 湖山武司
題字 東山右徹先生

第二回湘南中国語スピーチコンテスト3名出場 優勝 松ヶ浦 貴(1年F組)

1年F組松ヶ浦貴君が第二回湘南中国語スピーチコンテストにおいて優勝した。「入学した高校の授業にたまたま中国語の授業があったから学び始めた」とスピーチでは語っていたが、詳しく尋ねると「もとネット上の面白動画に中国の人々がコメントをしていて、その内容を知りたくなり学び続けた」と話してくれた。3分間の原稿を準備し中国語を暗記し、自らの思いを伝える意地のスピーチで優勝を勝ち取った。副賞は藤沢市の友好都市中国昆明市への今年8月の訪問であり今後の活躍も期待したい。藤嶺生が輝いた地域での活動となった。

令和5年2月11日13時よ 藤沢市、藤沢商工会議所、駐多摩大学湘南キャンパスに 日中国大使館、国際交流基金、第二回湘南中国語スピーチコンテストが行われた。主催者は藤沢地域の教育、産業、行政からのメンバーで構成された湘南中国語スピーチコンテスト実行委員会であった。(共催・後援、協賛は湘南日本中国友好協会、多摩大学、南地域の5校から9名(藤沢翔陵、藤沢清流、藤沢総合、湘南学園)、大学生の部は2大学から4名(昭和女子大学、多摩大学)であった。藤嶺藤沢からは中国語授業の受講者の松ヶ浦貴君(1F)、真庭虎々朗君(1F)、宮崎嘉親君(1A)の3名が出場した。コンテストでは1番目に宮崎君、「もともと中国語、中国の歴史に関心があり、自分の将来を考え中国語に可能性があると思ひ学び始めた。...という内容で3分間熱心に語り切った。3番目の真庭君は「高校に入学して、これまでに全くやったことのないこと、新しいこと



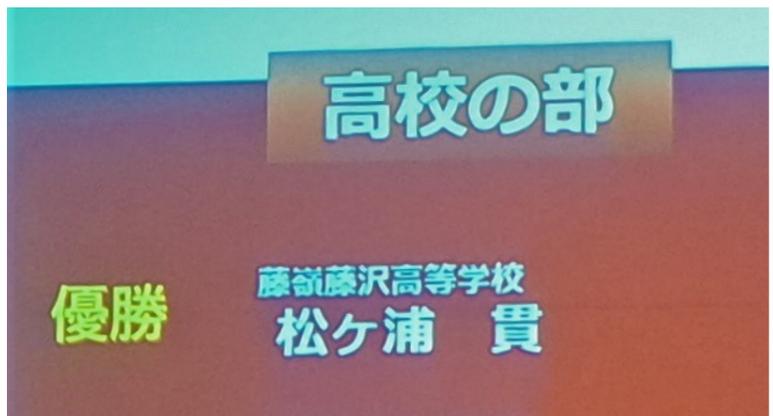
年末の原稿指導や発音特訓、コンテスト当日まで指導頂いた中国語の先生方と。
[左から、加藤萌香先生、松ヶ浦君、宮崎君、若山紅葉先生]

と、これまでの全くやったことのないこと、新しいこと



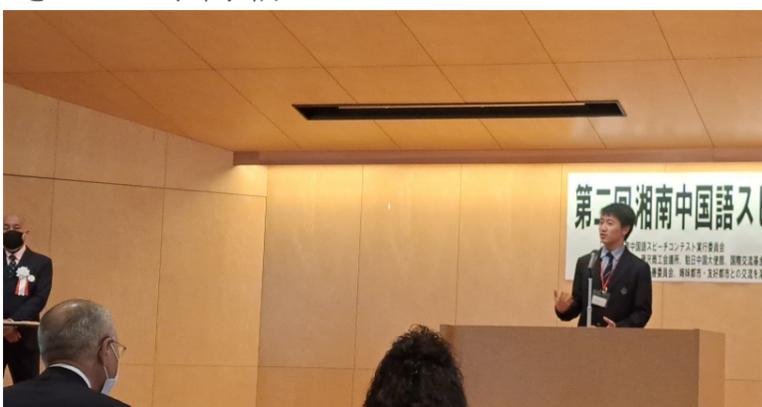
美しい発音と評価された宮崎君 敢闘賞

挑戦しようとして中国語の授業を受講し学び始め、なかなか上達しない中、学んでいく。...少しでも中国語を理解したい」という内容で中国語学習について丁寧に語った。6番目の松ヶ浦君は「中国に縁があったわけではなく、高校で中国語の授業がたまたまあったので、ただのふとした興味で学び始めた。...異なる言語を学ぶことにより異文化に暮らす人々の考え方の違いも学ぶことが



ゆっくり丁寧に語る真庭君 敢闘賞を受賞

できる」という内容で、原稿を演台に持ち込まず、前を向き、覚えてきた原稿を力強く語った。藤嶺生は入学から週1回の授業でここまでスピーチできるようになるものかと驚くことで、発音も暗記も努力したことが伝わってきた。一生懸命に準備を行い、勇ましい素晴らしいスピーチであった。審査は元中国重慶日本国総領事である瀬野清水氏はじめ中国語を母語とする審査員の方々を含む5名により行われ



審査員、来場者へ身振り手振りで思いを熱く語る松ヶ浦君

た。結果は、高校の部 優勝の栄冠を1年F組の松ヶ浦貴君が手にし、真庭虎々朗君、宮崎嘉親君とともに敢闘賞を手にした。松ヶ浦君の姿は、スピーチ前の緊張した面持ちとは打って違ってやり遂げた輝きを放っていた。



受賞後、メディアからのインタビューが40分以上続いた。
㊸中国の新華社、㊹J-COMの取材の様子。タウンニュース他も。

昆明市とは？

藤沢市と昆明市は友好都市提携40周年を2021年に迎えている。今回の会場の入口には左の2枚のパネルが並べられていた。中国国歌作曲者聶耳が鶴沼海岸で亡くなり、聶耳を偲ぶ碑を藤沢の人々は建て守ってきた。聶耳の生誕の地が昆明市であることから友好関係が始まったと藤沢市のHPに説明がある。藤沢市の方から「昆明市の花は椿、白族の衣装が有名で、聶耳氏はバイオリンリストであった」とパネルの説明を頂いた。

